

迷彩服の「団見誤る

同僚 突然銃撃、避けられず 証言

【キリス共同】シリア北部アレッポで20日死亡した日本人女性ジャーナリスト、山本美香さん(45)らは、取材中に近づいてきた「迷彩服を着た一団」の正体を見誤り、突然の銃撃を回避するすべがなかった。行動を共にしていた同僚の佐藤和孝さんの証言から悲劇の瞬間を再現した。(1面関連)

トルコ南部キリスで21日に共同通信の取材派のどちらが掌握してに、佐藤さんによると、山本さんと佐藤さんはパレスチナ人記者ら2人とキリスからシリア側に越境。反体制派「自由シリア軍」の部隊に同行した。アレッポに着いた一

行は、政権側、反体制派のどちらが掌握して、佐藤さんによると、山本さんと佐藤さんはパレスチナ人記者ら2人とキリスからシリア側に越境。反体制派「自由シリア軍」の部隊に同行した。アレッポに着いた一

佐藤さんは当初、自由シリア軍の部隊かと思いい、カメラを構えた。しかし、ヘルメットをかぶった先頭の部隊員が銃を構えた瞬間、政府軍が政府側の民兵だと悟ったのだという。「それと同時に銃口は

佐藤さんは当初、自由シリア軍の部隊かと思いい、カメラを構えた。しかし、ヘルメットをかぶった先頭の部隊員が銃を構えた瞬間、政府軍が政府側の民兵だと悟ったのだという。「それと同時に銃口は

が開かれた」銃撃は「予想外」だった。その際、山本さんは佐藤さんの「2、3分後」にいた。相手部隊は約20分前方に迫っており、銃弾が飛び交う中、取材の一行はちりぢりに。佐藤さんは左手のアパートに逃げ込み、最上階の部屋に身を潜めた。気付いたときに山本さんは見えなかった。それが午後3時半ごろのことだ。

戦闘は1時間ほど続き、事態が沈静化してから外に出た佐藤さんは、幹線道路でタクシ

「運び込まれた」師は「運び込まれた」きには事切れていた。出血多量だった」と明した。

「顔はきれいだった。体はまだ少し温かかた。感情を押し殺すかのように佐藤さんの口調は淡々としていた。

山本さんは2008、11年、講演のため岡山を訪れた。その際に知り合っていた。まだ信じられない」と悲痛な表情を浮かべた。

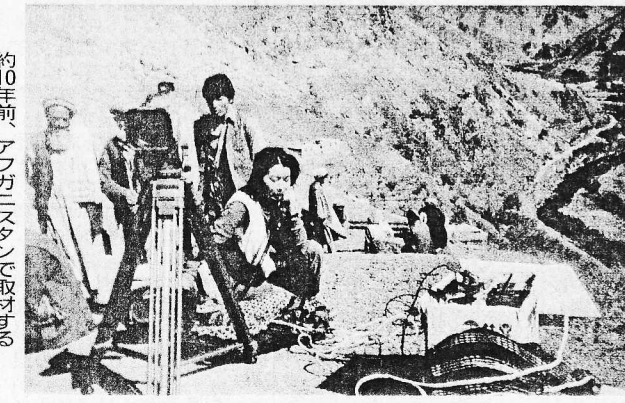
出会ったのは1999年。小川教授は、国際医療ボランティアMDA(岡山市)がアルバニアに派遣したボランティアの難民支援ボランティアの一員として参加。日本の支援団体がいると聞き、山本さんが訪ねてきた。約1カ月半、夕食を一緒に囲んだ。穏やかな女性だったが、言葉は力強かった。

以降、山本さんとは年1度程度、メールで近況を報告。講演依頼も快く受け入れ、「戦場から国際貢献を考える」などをテーマに、

岡山大で2度講演

山本さん 依頼の小川教授「信じられない」

紛争地取材が専門



約10年前 アフガニスタンで取材する山本美香さん(遺族提供)

山本さん「政策仕分け」で指摘も

フガニスタンで、女性ウガンダやチェチェの暮らしに密着した取材を行い、イラク戦争取材した山本さん。「やはでは、空爆下のバグダッド市民に寄り添って。03年度ポーン・上きっち帰ってくる緊田記念国際記者賞の特張感が好き」と語っていた。

政府の「提言型政策仕分け」で、山本さんは「紛争地の子どもたちが外交分野の「仕分け」は「大きくなったら、絶人」に選ばれたのは昨対戦争なんかない時代に年11月。行政刷新会議したい」と話してしまし関係者は「在外公館のた。世界中で苦しんでいる方について、ビザる人がいることを知ったの発給など紛争地取材上で、安全で自由な社会の経験に基づいた具体がずっと続くように、努的な指摘をしてくれ力してください」と訴えていた。

学生らにイラク戦争の取材時の状況を詳しく語ったという。「一人に、もっと世界に目を向けてほしい」という思いを強く感じた。女性ジャーナリストしかできない仕事もある、と繰り返していた。まだまだ活躍してほかった」